

筑波大学新聞

第304号

編集責任 筑波大学新聞
編集代表 福原直樹
TEL: 029(853)2040・6699
E-mail: shinbun@sakura.cc.tsukuba.ac.jp
月刊

発行所 筑波大学
茨城県つくば市
天王台1-1-1

国際担当中副学長インタビュー 4カ国で新拠点設立の意向



辻中豊 副学長

国際化戦略の今後を語る

辻中副学長(国際担当)は本紙のインタビューに応じ、本学の今後の「国際化戦略」について語った。この中で同副学長は、本学の海外事務所・拠点の展開について、将来的に▽韓国・ソウル▽アメリカ・東、西海岸▽インドネシア・ジャカルタ▽ブラジル・サンパウロ……の4カ国に新たに設けたい意向を表明した。現在あるチユニス(チュニジア)など5カ国6事務所に加え、これらの事務所・拠点ができた場合、主要大陸に本学のネットワークが広がることになる。(小川玲、二宮健太II社会学類3年・6、7面に関連特集)

このうち、ジャカルタ事務所は、千葉大がすでに現地に設置した事務所を共同使用する。千葉大も今後、

本学のホーチミン事務所(ベトナム)を利用して、またサンパウロでは来年度にも、サンパウロ大学の敷地に事務所を設ける提議を同大学と結ぶ方針。ソウルでも高麗大学などと現地大学の協力を視野に、事務所を開きたい意向だ。一方、アメリカでは、

本学が今年度から加盟した「日米研究インスティテュート」(首都・ワシントン)の事務所を米東海岸の拠点とした意向のほか、米西海岸の拠点としてはカリフォルニア、ワシントン州を視野に入れている。「日米研究インスティテュート」は本学を含め、

海外事務所は、現地の留学希望者の支援や、本学の研究者が現地の大学・研究機関などと共同研究を行う際の、現地関係者との連絡のサポートなどを行う。本学では06年5月に、チユニスに初の海外事務所「筑波大学北アフリカ・地中海連携センター」(現北アフリカ・

地中海連携センター)を開校した。同副学長は「広い地域を視野に入れ、(国際化戦略の)取り組みを進めること」で世界的な大学間競争に

対峙し、地球的問題解決への貢献を目指したい」と話している。

同副学長は「広い地域を視野に入れ、(国際化戦略の)取り組みを進めること」で世界的な大学間競争に

対峙し、地球的問題解決への貢献を目指したい」と話している。

「放火させない環境作り」を

消防本部が異例の注意喚起

本学周辺にある階建て木造アパートを中心に、10月中旬〜11月初旬、不審火が14件続き、その際燃えたのが洗濯物、雑誌などアパートの外に出ている可燃物が大部分だったことが、つくば市消防本部などへの取材でわかった。アパートの住人はほとんどが学生で、同本部は、本学と筑波学院大学、筑波技術大学の3大学に文書を出し、「建物の外に可燃物を放置しない」など、学生が不審火防止対策を徹底するよう異例の注意喚起を行っている。(鈴木拓也II社会学類1年)

つくばの不審火

一連の不審火でつくば一帯で11件の放火を認めており、同署で残る13件の関係する男性(25)を11月10日、現住建造物等放火罪の容疑で逮捕。同署への取材では警備体制を強化して

いたが、11月10日つくば市

つくば市消防本部、つ

つくば市消防本部は、一連の不審火に

つくば市消防本部は、一連の不審火に

つくば市消防本部は、一連の不審火に

つくば市消防本部は、一連の不審火に

つくば市消防本部は、一連の不審火に

つくば市消防本部は、一連の不審火に

つくば市消防本部は、一連の不審火に

つくば市消防本部は、一連の不審火に

つくば市消防本部は、一連の不審火に

つくば市消防本部は、一連の不審火に

くば中央署への取材では、不審火は本学を中心に半径約200m内に集中。春日3丁目2件、同4丁目3件、栗原で4件、花畑1丁目3件、天久保2丁目と3丁目それぞれ1件だった。大きな被害はなかったが、ほとんどがタオルなどの洗濯物や段ボール、雑誌、新聞など、現場アパートの外に出ている可燃物にマッチで火をつけ、エアコンの室外機や通風口などに放り込むなどしていた形跡があるという。

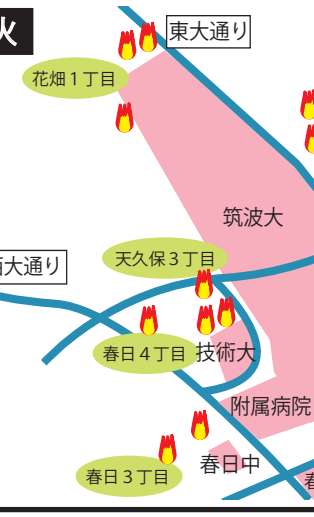
また逮捕された男性はアパートに放火した理由について、アパートは深夜も人の出入りがあり、近づい

ても気づかれにくいことなどを挙げているという。

一連の不審火に対し、つくば市消防本部は本学などに文書を出し、学生に①建物のそばに雑誌など可燃物を置かない②洗濯物は取り込みを忘れない③ゴミは収集日の朝に出すほか、外に出した場合はフタをす

る……など、学生がアパートなどで「放火させない環境作り」をするよう異例の注意喚起を行った。また同本部は、自転車や二輪車などのサドルやタイヤに放火されるケースもあることから、これらを路上などに放置しないようにも求めている。

日時	発生場所
10月14日	栗原
10月16日	花畑1丁目
10月17日	春日4丁目
10月17日	春日4丁目
10月17日	天久保2丁目
10月19日	花畑1丁目
10月26日	天久保2丁目
11月1日	栗原
11月1日	春日3丁目
11月2日	花畑1丁目
11月2日	春日4丁目
11月9日	春日3丁目
11月10日	栗原



秋が深まるにつれ、筑波キャンパスは美しい黄金色に染まった。冷たい風が吹くたびに、木々はざわめき、無数のいちょうが空に流れる。これからどんどん気温は下がる。暖かな春は、まだまだ先だ。(写真・二宮健太II社会学類)

山田学長 再任の意志示さず 候補者の選考始まる

脳梗塞で入院療養中の山田信博学長が、来年3月の任期満了で退任すること、10月24日に発表された。山田学長は8月3日に脳梗塞で倒れ、都内の病院に入院した。その後も都内でリハビリテーションを続けていたが、10月21日に再任の意思がないことを表明したという。これを受け12月

から候補者の選考や学内投票が行われ、来年1月下旬に次期学長予定者が公示される。現在は清水彦副学長(総務・人事担当)が学長の職務を代行している。山田学長は2009年4月に本学附属病院院長から学長に就任。任期中は本学のブランディングプロジェクトなどを意欲的に進めてきた。

山田学長は2009年4月に本学附属病院院長から学長に就任。任期中は本学のブランディングプロジェクトなどを意欲的に進めてきた。

青木教授らが受賞 定期コンサートを開催

初優勝の可能性も
猶本が表敬訪問
本学から3団体出場
筑波の「いま」を表現

筑波の「いま」を表現

9年ぶりの出場で3位 シード権獲得も

全日本女子駅伝対校選手権大会
第30回全日本女子駅伝対校選手権大会が、10月28日に仙台市陸上競技場(仙台市宮城野区)周辺で行われた。過去3回の優勝を誇る本学は9年ぶりの全大会出場となったが、大

森由香子(体専2年)が順調なスタートを切り、2時間7分41秒で3位という成績を収めた。この結果により、本学は来年の同大会のシード権も獲得した。(8、9面に関連記事)



入賞の喜びを見せる本学チーム

紙面から

- 第23回つくば賞 合唱団むくむく
- ラグビー ヤングなでしこ
- つくばチャレンジ 「筑誕」
- 青木教授らが受賞
- 定期コンサートを開催
- 初優勝の可能性も
- 猶本が表敬訪問
- 本学から3団体出場
- 筑波の「いま」を表現
- ミニ特集 3
- 働く職員さん特集
- 特集 6,7
- 本学と海外をつなぐ
- 海外事務所の活動

冬の訪れを告げる木枯らし一号が吹いた。11月18日のこと。今年はいつになく暖かい日々が続く。例年より20日以上遅れてやってきた風だった▼だが、例年より早く冬物のコートをおろした。まだまだ寒くなるから。そう思い、いつもは初雪のころまで秋用の上着で乗り切ったが、今年はその思いがけない。12月から、いよいよ就職活動が始まるのだ▼「女子のリクルートスーツは、スカートの方がいい」。姉の教えに従い、11月に行ったインターシップでも常にスカートで臨んだ。だがこの時期だとさすがに寒い。未来のために必要と、今までのルールを変えた▼就職が「冬の時代」と言われて久しい。来年3月卒業予定の大卒求人倍率は前年より低下して1.23倍。世間のイメージほど厳しくないが、自分の将来を左右する就職先を短期間に選択するのは簡単ではない▼近く、日本の未来を決める衆院選も行われる。就職先を決めるのと同様の真剣な気持ちで一票を投じたい。明日へと導く人と党を選ぶ義務が、私達にはある▼就職と選挙。いずれも初めての経験だ。選択の一つひとつに、将来への責任が生まれる。例年通り、寒空に「春遠からじ」と願う。だがこれからは春、いや明るい未来は、自分でつかむべきなのかもしれない。それも過去のルールや先入観にとらわれない、柔軟な姿勢で。

「拳公開!」働く職員さん特集

私たちのキャンパスライフは、多くの大学職員の手によって支えられている。しかし彼らが普段どのような仕事をしているのかは、意外と知られていない。今回は「職員さん」の仕事にスポットを当てた。(鈴木かおる、望月麗二比較文化学類 原啓一郎社会学類)



関わる
 大学のキャンパスライフは、多くの大学職員の手によって支えられている。しかし彼らが普段どのような仕事をしているのかは、意外と知られていない。今回は「職員さん」の仕事にスポットを当てた。(鈴木かおる、望月麗二比較文化学類 原啓一郎社会学類)

学生生活課

大学へ登校し、自動販売機で飲み物を買って、食堂で昼食をとる。放課後はサークル活動を楽しんだり、学生宿舎へ帰る。こんな何気ない学生生活の一端のほとんどの部分が、学生生活課と関わっている。



違法駐輪の警告札を付ける学生生活課職員

「学生が安全・安心して過ごせる環境のサポート。新人生への教養案内や駐輪指導をするため、4月は毎朝駐輪場に立ち、指導を行っている。学生宿舎担当の職員は頻繁に、非常口の点検のため、自主的に学生宿舎を見回すという。すべては学生の安全のために行われている。学生の事件・事故に24時間対応できる体制を整え、何かあれば夜や休日でも駆けつける。「小学校3年生の娘は最近まで、私が警察の仕事をしている人だと思っていました」と話す。土下は「学生が安

安全な生活をサポート

全に学生生活を送るための仕事なので頑張ることができると語る。普段の学生へのサービス向上も欠かせない。今年にあって、学生生活課の事務室の配置が変わった。以前の配置では、入ったすぐ窓口がどこか分からず、職員が横を向いて仕事をしていたため、訪れた学生が話しかけづらいという問題があったからだ。現在は、入ったすぐに銀行のようなカウンターがあり、数人の職員が常にカウンターを向き、入ってきた学生にすぐに対応できるようになった。学生に近い

「学生が安全・安心して過ごせる環境のサポート。新人生への教養案内や駐輪指導をするため、4月は毎朝駐輪場に立ち、指導を行っている。学生宿舎担当の職員は頻繁に、非常口の点検のため、自主的に学生宿舎を見回すという。すべては学生の安全のために行われている。学生の事件・事故に24時間対応できる体制を整え、何かあれば夜や休日でも駆けつける。「小学校3年生の娘は最近まで、私が警察の仕事をしている人だと思っていました」と話す。土下は「学生が安

就職課

就職課は、教員組織のキャリア支援や協力し、学生のサポートやイベント運営を行う部署だ。短期的な就職活動だけでなく、入学時から就職までの長期的な「キャリア」の積み重ねを支援している。

「学生とともに活動する」は、3人の学生から結婚式に呼ばれて、「時代や社会の状況によって就職をめぐる環境は違ってくる。就職課は学生と強いつながりをもつ部署だからこそ、長い時間をかけて継続的にサポートしていきたい」と語る。



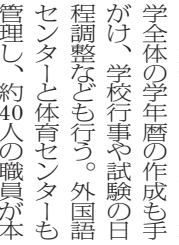
学生の相談に応じる就職課職員

就職課の職員は、これまでの就職活動や進路に関する相談などを予約制で行っており、毎年のべ2000人以上の学生が相談に訪れるという。就職課長の久保田優さんは、「学生とともに活動すること」を信条に「13年間就職課で学生を支援してきた。学生の相談を受ける際、就職課には心強いサポーターがいることを忘れてはならないだろう。」



伝える
 「学内のさまざまな情報を迅速に、的確に公開し、筑波大学の魅力を知ってもらうことが私たちの仕事」と語る広報室長の大日向正人さん。「筑波大学」を広く知ってもらうために、本部棟4階にある広報室はどのような仕事をしているのだろうか。

発信の対象は、学内の生息する動物などの身近な話題まで、これらの媒体を通して「伝える」と大日向さん。伝える対象は本学生や教職員、受験生や本学生の父兄、研究機関や企業、地域など。受験生へ向けては本学を紹介するイメージビデオを、留学生などへ向けては英語版のウェブページを使うなど、校生らに学内を案内する



支える
 学生なら誰でもが気になるのが成績や履修のことだ。私たちの学習環境は日々どのようなように管理されているのか。そんな本学の教育に携わる教育推進課の仕事を、同課長の平松昌弥さんに話を聞いた。

「すべての学生に学習の不利が生じないよう注意する必要がある」と平松さん。T WINSをはじめとする成

「筑波大学」の魅力を発信

「大学の将来構想から、学内に生息する動物などの身近な話題まで、これらの媒体を通して「伝える」と大日向さん。伝える対象は本学生や教職員、受験生や本学生の父兄、研究機関や企業、地域など。受験生へ向けては本学を紹介するイメージビデオを、留学生などへ向けては英語版のウェブページを使うなど、校生らに学内を案内する

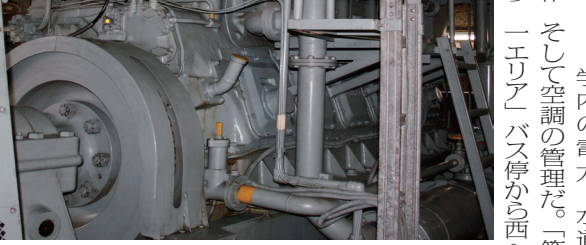
「大学の将来構想から、学内に生息する動物などの身近な話題まで、これらの媒体を通して「伝える」と大日向さん。伝える対象は本学生や教職員、受験生や本学生の父兄、研究機関や企業、地域など。受験生へ向けては本学を紹介するイメージビデオを、留学生などへ向けては英語版のウェブページを使うなど、校生らに学内を案内する

快適な学びの基盤を

「世界を舞台に活躍できる「グローバル人材」の育成を目指したカリキュラムを展開している。この取り組みの一つが留学生との交流活動だ。日本の大学の国際化を目指した「グローバル30」の拠点校の一つである本学は、英語のみで学位が取れるコースを開設するなど、留学生の受け入れを強化している。「本学は教育改革を先導する大学であり続けたい。時代の

施設部

私達が普段過ごしている建物や宿舎。これらの設備を管理し、故障や不具合が起きたときの対応をしているのが施設部だ。建物に関するあらゆる事が、施設部の仕事。雨漏りや水漏れ、トイレのつまり、ドアの鍵の交換など、小さな「困った」に素早く対応する。学生や教職員が各支



中央機械室にある発電装置

また、今後も多くの建物を改修する予定だ。未改修の学生宿舎や、空調設備の不具合がある建物など、施設部はこれからも大忙し。それでも「建物を作って使っている人が喜ぶのを見るのが一番嬉しい」と笑顔を見せる松崎さん。私達の快適なキャンパスライフには、施設部という「縁の下」の力持ちが欠かせない。

建物の大黒柱

「建物の大黒柱」は、学内の電力、水道の最も大きな仕事は、部棟で緊急時対応ができたもの。そのため、非常に頼りにしている」と松崎さんは語る。

反射鏡

万能食品お米の 素晴らしさ

中村雄太(人文1年)

みなさんにはどのような相棒がいるだろうか。人間、ペット、植物、無機物など、そんなものはそれぞれであらう。相棒なんて個人個人のライフスタイルや性癖によって異なるものだ。だから、これから私が書く相棒に関する文章も一個人の戯言だと思って読んで欲しい。そもそも、相棒とはその昔、かみを同時に持つて仕

か言われそうなので、いか言っておくが、パンは確かにうまい。私だって食べる。しかし、私にはお金がない。お金がない、そのうえ主食で相棒の米が手に入るのにパンを食べる理由が見つかからない。パンは長期間の保存はできないし、レンジも何か別の食材が必要でお金がかかる。それに比べれば、塩があればおいしく食することができる米を私は推挙せざるを得ない。

結局のところ、私の如何にお米が素晴らしいかというところをつらつらと書いただけの記事になってしまったが、これを機会に普段私たちが何気なく食べている米がどれほど優秀かを考え直してもらえれば幸いである。

今月のテーマ



我が相棒

相棒との別れは 自立の始まり

ジョン・ブレイク(P.N)

水谷豊が成宮寛貴を新たな相棒にして久しいが、さあ、お題は「我が相棒」である。あえて言うならば、平砂食堂である。別に食堂の回し者でもないし、ふざけているわけでもない。筑波大学に入学して以来、僕は自炊をまったく言っていない。横着者でも、ゆとりでもないのしつてもらって構わない。だが、自炊をしない「同志」は意外といつた出来合いのものを売っているが、平砂食堂を選択する者は数少ない。サークル活

次号のテーマは 「受験期の思い出」です

先 TEL 029-853-6999
e-mail shinbun@sakura.cc.tsukuba.ac.jp

記者の 声



梅野なぎさ

基本的には単一民族・単一言語国家とされる日本は今、その転換期を迎えつつある。法務省によると日本の外国人登録者数はここ10年で約20万人増加。政府も人口減少対策の一環で、外国人受け入れ方法を検討していくという。だが様々な言語や習慣、価値観を持つ外国人といかに共生するかという問題は、まだ解決されていないと思う。

私は小笠原出身だ。そこでは今でも、欧米や太平洋諸国を先祖にもつ島民が暮らしている。彼らは一目ですぐわかるし、戸籍上カタカナの名人も多い。だが彼らが異民族として別視されることはまず、ない。小笠原島民として普通に暮らしているのだ。日本人が多くの外国人を受け入れる理由として、単一民族国家として歩んできた日本の歴史を指摘する。日本には移民受け入れの成功談も失敗談もない。だから、異なる民族や文化といかに共生す



多文化社会の島に学ぶ

だが彼らは特別な存在ではなかった。高校の同級生も6分の1が欧米系の子孫だった。だが、違いといえは彼らが日曜日に必ず教会に行くことくらいだ。島の郷土芸能や料理にも多くの外国文化が混在している。ハワイアンなどの西洋行事も島全体で行った。多文化が入り混じる島社会は島民にとって当たり前だった。このように小笠原では、何世紀以上も前から独特の多文化社会が成立してきた。欧米系などの島民は幾度となく国籍が変わったが、彼らは言語や文化など日本的な要素を自分らに合う形に変化させ、適応させ、日本人側もそれに応じた。そして今は皆「小笠原島民」としてアイデンティティを確立させている。日本が移民受け入れを進める際の課題は、彼らの多様性がいかに対応してきたか。これまで述べたように小笠原はすでにそれを経験している。にもかかわらず、沖縄などの地域に比べると、小笠原社会に関する学術的研究は圧倒的に少ないように思う。異なる人種の共存社会が構築されてきたその過程を考察することは、日本の行く末を見守るための一助になるはずだ。小笠原での同化、融合の過程に学ぶ点は多い。(社会学類3年)

Doiworkクリスマスライブ

筑波大学アカペラサークルDoiworkクリスマスライブ2012が12月15日(土)に、つくばカピオ(つくば市竹園)で行われる。

チケットは前売り・取り置き500円、当日600円。小学生以下は無料。当日、宣伝用フライヤーを持参すると500円。17時30分開場、18時開演。問い合わせ＝xmaslive2012@gmail.com

応援部WINS単独講演「桐華祭」

筑波大学応援部WINSの単独公演第2回「桐華祭」が12月21日(金)に、つくばカピオ(つくば市竹園)で行われる。演目は「筑波大学応援歌」「学生歌」「常陸野の野球応援メドレー」など。入場料は無料。18時30分開場、19時開演。問い合わせ＝wins_tsukuba_cheer@yahoo.co.jp

理数学生応援プロジェクト

文部科学省による「理数学生応援プロジェクト」の一環として本学で行われている、理工農系の学類生の研究活動を支援する「先導的研究者体験プログラム」の参加学生による成果発表会が、2013年1月21日(月)に行われる。会場は3A204、3A207、3A209教室。10時から17時まで。問い合わせ＝ARDEapplication@ac.it.tsukuba.ac.jp (1勝)

筑波大学 出版会 新刊案内

現代人のための統合科学

「ビッグバンから生物多様性まで」
小笠原正明、新井一郎、澤村京一、杉田倫明、守橋健二 編著

現代人のための統合科学
Integrated Science for Students of Today
From the Big Bang to Biological Diversity
ビッグバンから生物多様性まで
小笠原正明・新井一郎・澤村京一・杉田倫明・守橋健二 編著
Masaki Ogasawara / Ichiro Arai / Kyochi Sawamura / Masahiko Sugita / Kenji Morishima

「現代人にとって必須の科学的素養とは何か？」現代科学は近代的な産業の基盤になっていくだけなく、日常生活の一部にも入り込んでいる。現代人は、そのときどきの興味と関心と必要性に基づいて科学的知識を手に入れることができるが、自己流の学び方ではどうしても偏るし時間もかかる。スポーツと同じで、初心者の中にはちゃんと専門家から手ほどきを受けておいた方が後のためにはよい。本書はその「学び」のために、諸科学が紡ぎ出した糸で編んだ連続的な網としての現代科学の成果を、本学の教員18名がわかりやすく俯瞰して書いた現代科学のハンドブックである。練習問題や基本的な用語の解説、科学における発明・発見の歴史年表が含まれており、大学の教科書としても、また一般の読者物や座右の書としても有益な一冊。A5判並製、約400頁。3500円十税。

ときめき太鼓塾 十周年記念公演 舞 づくばカピオで単独公演



塾生の熱気あふれるパフォーマンス

太鼓の音で観衆の心を打つ

ときめき太鼓塾の「筑波大学ときめき太鼓塾十周年記念公演舞」が、10月24日つくばカピオ(つくば市竹園)で開催された。会場には地元住民や本学生ら200人が来場し、和太鼓を中心とした日本の伝統音楽を味わった。

公演は笛の静かな音で始まった。体の芯まで響き渡る太鼓の音が会場に響き、塾生全員が大きな掛け声とともに、バチが太鼓に振り下ろされた。曲調につられ、会場からは時折拍手がわき上がった。

公演の最後の楽曲は、塾生全員が舞台上で演奏する「大鼓」。ときめき太鼓塾が代々演奏してきた曲。塾長の田代葵さん(日3年)は「先輩が築いた歴史を感じながら演奏した。こぼれど大きなホールで公演したのは初めてで、たかきんのお客さんに観せられてよかった。今後もっと大きな会場での公演を開くことができたら嬉しい」と笑顔で語った。

さらに、塾生が横一列に並び、隣の人の太鼓を叩き合うなどのパフォーマンスを次々と披露。会場の熱気は頂点に達して、この日一番の大きな拍手が送られた。(12面に関連写真)

歌の楽しさを共有する

筑波大学合唱団むくむくの第32回定期コンサートが、10月27日つくばカピオ(つくば市竹園)で開催された。

多くの観客が訪れた今回は、3年生の最後の舞台。団長の大山直紀さん(教育3年)は、はじめに「歌をどれほど、どのように愛しているのかを表現したい。また、皆さんと歌の楽しさを共有したい」とあいさつした。だが、その後の曲紹介では緊張から合唱曲の作曲者を出せないまま、このため観客からは笑いが起きるなど、コンサートは和やかな雰囲気ではなかった。

後半は合唱曲とポップが披露された。孤独な少女が歌を通して仲間を作り、成長する姿を描いたストーリーだ。「あなたがたごさ」や「日立の樹」などが歌われ、それぞれの曲が少女と仲間を結び付け、次第に打ち解けていく。最後に「歌が私たちをつなぐ」と題し、劇を締めくくった。大山さんは「もっと仲間たちと歌いたい」と思いを語り、最後にシンガーソングライターのYUIが作詞作曲した「fight」を歌った。涙をこらえながら歌う団員もおり、観客からは惜しめない拍手が送られた。



出演者全員が登場したラストシーン

DANCE EXPRESS vol.7

ダンス部など5団体が共演 多種多様な演技を見せる

ダンス部を中心としたダンスグループによる公演「DANCE EXPRESS vol.7」が11月21日、つくばカピオ(つくば市竹園)で行われ、本学生、地域住民などが多数来場した。ダンス部を筆頭に、よさこいソーランサークル斬桐舞、ストリートダンスサークルREAL JAM、つくば市内ダンス教室「D-Live」ダンススクール、石淵聡氏(大東文化大・専任講師)による集中講義「運動伴奏法」受講生ら5団体が出演、15の演目が披露された。

最初の演目はダンス部による「OPENING-arrival」で、テンポの良いリズムに合わせ、力強く明るい雰囲気の中で、ダンスを披露した。続いて行われた演目「伊藤家の食卓」は、祖父、母、姉弟の5人家族の日常を描いた。テールや座布団など、家庭にあるものを大胆に使いながら、家族の団らんを楽しんで演じた。

また斬桐舞は、出演者が観客席を回り、来場者とハイタッチするなど、観客を巻き込んだパフォーマンスを披露し会場を沸かせた。最後の演目「ENDING」では出演者全員がステージに登場し、拍手喝采で閉幕した。

来場した女子学生は「伊藤家の食卓」はわかりやすく楽しげでよかったと話した。

原点 GEN-TEN

今の僕の原点は、日本武道館にある。

2001年のこと、もう少し自分の好きなことをしたいという「下心」から、僕は横浜国立大学の大学院に進学した。ちょうど一橋大学に内地留学をさせていた指導教員、中村博之先生に見つからぬよう、横国大体育会空手道部でコーチと試合監督をしながら、大家に本拠を置く偶成会高木道場で日々稽古をしてきた。空手で、チャンピオ

ンになりたかった。そんな修士1年の3月、和道会という流派の世界大会代表選考会に挑戦したが、自分の心の弱さから、元気のよい高校生に逆転負けをした。その直後の関東大会では、

木秀穂師範(全日本空手道連盟八段)から、今の僕の原点となる指導をいただいた。「お前は運がない。だから空手はもうやめなさい。一方、こんなに適当にやっている学園で、横

高木秀穂先生がおっしゃったように、なぜか僕は運があった。たまたま、中村博之先生からその時与えられていた研究テーマが「サービスの管理会計」であった。そして、中村博之先生、高

大きな「下心」の上に、学園に生きる誠実な「土」の精神を植え付けてくださった。すると、筑波大学が僕にチャンスを与えた。筑波大学の学生と先生方は、僕の「土」の精神を鍛え、大きく育てて

会賞をいただいたのである。僕は賞状を片手に、高木秀穂先生のもとへ向かった。高木秀穂先生は、いつもの意地悪な笑顔で、「次は世界チャンピオンだな」とおっしゃった。

僕は、高木秀穂先生のような指導者になろうと思っている。もちろん、世界チャンピオンにもおかた・ゆきこ

「世界チャンピオン」を目指す 空手から会計学の世界へ



岡田 幸彦

ウォーミングアップ中に右足の指のつけ根を7針縫うけがをし、大切な試合を棄権することになった。こうして修士2年になった4月、日本武道館での稽古で再び怪我をしてしまった際、偶成会の高

国大の大学院にいるのは運がある。だから学園に集中して、学園でチャンピオンになりなさい。」その時の情景と涙が、今の僕の原点である。そこには「志」はなかったが、覚悟は決めた。

橋賢先生、高木秀穂先生は、日本を代表する会計学の「道場」である一橋大学で「けいこ」することを強くおすすめてくださった。一橋大学では、廣本敏郎先生、尾畑裕先生、挽文字先生が、僕の

少年老い易く学成り難し。一寸の光陰軽んずべからず。さらなる幸運に恵まれた。「サービスの管理会計」の研究で、2010年度日本会計研究学会学

くられた。少

世界遺産専攻展・写真展

世界遺産での活動を紹介します

人間総合科学研究科世界遺産専攻の教員と修士の活動を紹介します。「世界遺産専攻展」が、芸術学系棟1階、2階ギャラリーで10月1日から11月30日にかけて開催された。教員による「世界遺産写真展」も大学会館アトススペースで同時開催された。世界遺産専攻は、世界文化遺産・自然遺産の保護を通じて国際貢献することが目的で、遺跡の修復整備などを行っている。「世界遺産専攻展」に展



活動紹介のポスターを見る本学生

「世界遺産写真展」では、世界遺産専攻の教員が撮影した世界遺産の写真を展示。1981年に文化遺産に登録された旧エルサレム市街や、88年に同遺産に登録されたマリ共和国のトンブクトゥなど、世界中の世界遺産の写真が展示された。旧エルサレム市街は、この国にも所属しない世界遺産」と題され、宗教施設の管理の複雑さや文化の共存についての問題も提示していた。

世界遺産写真展を訪れた本学の女子学生は、「白川郷に行ったことがあるので、合掌造りの写真が印象に残っている。どの世界遺産も美しくかったので、いつか行ってみたい」と話した。

本学と海外をつなぐ 海外事務所の活動

本学は2006年5月にチュニジアに初の海外事務所「チュニス事務所」を開設し、12年間で計5カ国6カ所に事務所を拡大した。辻中副学長(国際担当)によると、今後インドネシア・ジャカルタなど新たな4カ国にも海外事務所・拠点を開設したい意向だ。だが事務所などの活動はあまり知られていない。その実情を交え、本学の「国際戦略」を取材した。(梅野なぎさ、小川玲、平嶋健人、社会学類、倉沢美紀、国際総合学類、加藤茂行、地球学類)

概論

本学の国際戦略は海外事務所を設置し、▽海外の大学や研究機関との共同研究▽留学生の誘致▽日本人学生の海外留学▽学生同士の学術交流▽留学したOBOGのコミュニケーション

海外事務所の役割



国際部 森尾 貴広 准教授

本学の国際戦略を推進するのが国際部だ。同部で企画・立案を担当する一方、

ニティの充実▽本学研究の紹介活動……の促進などを目標とする。本学では北アフリカや中央アジアなどの研究に力を入れており、これまで海外事務所はこれらの地域を中心に設置している。国際部の森尾貴広准教授とチュニジア、ベトナムの事務所関係者らに本学の海外での活動の実態を聞いた。

現在、「海外大学共同利用チュニス事務所」の副所長を務める森尾貴広准教授に話を聞いた。

11月5日、森尾准教授は北アフリカ・アルジェリアの北西部にあるオランに開かれた日本留学の説明会で、本学紹介のプレゼンを行うためだ。集まったのは現地の学生・教員ら約850人。説明会では自

ベトナム事務所

ベトナム・ホーチミン市に本学3番目の海外事務所「ホーチミン事務所」がある。ベトナム人学生を本



ホーチミン事務所が開かれた日本語教室

09年に事務所が開設後、本学へ留

留学希望者を育てる

分が本学の顔になる。本学の印象をどう与えるかは自分次第。そう考え緊張した、という。

今回のプレゼンでは本学の特色を「研究学園都市にいる研究者たちの指導も受けられる」などと強調した。プレゼンの後には、名前や連絡先など参加者のデータをこまめに回収。帰国後、これらの人々に本学の情報を発信していくことからスタートが始まる。例えば、帰国後もメールで、本学への留学希望者の相談にこまめに乗る。「奨学金はどうすれば取れるか」などの質問が多い。留学の志望動機には漠然としたものも多く、「日本に留学したいなら、ちゃんと研究を向上にもつながり、大学

学に呼び、また本学生をベトナムに送り出す窓口として、国際戦略の一翼を担う。同事務所の長の大根田修教授(医学医療系)、同事務所国際連携コーディネーターの松澤暢子さん(国際部国際企画課)に話を聞いた。

学に呼び、また本学生をベトナムに送り出す窓口として、国際戦略の一翼を担う。同事務所の長の大根田修教授(医学医療系)、同事務所国際連携コーディネーターの松澤暢子さん(国際部国際企画課)に話を聞いた。

学生と学生をつなぐ

ムは人と人との関わり合いを大切にすることがあり、大根田教授は「日本では現在、メールや書面でのやりとりが増え、人と話すことが少なくなった。ベトナムにきた本学生には、ベトナムで人とのつながりを肌で感じてほしい」と話す。大学との協定締結や、日本

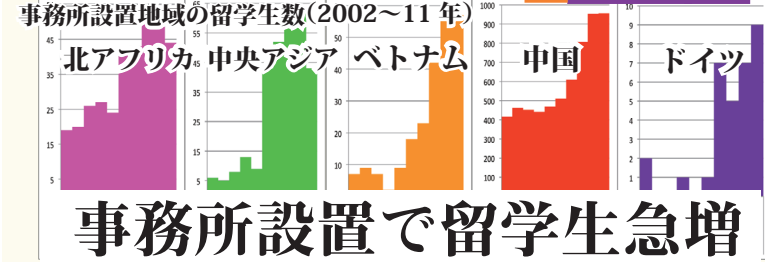
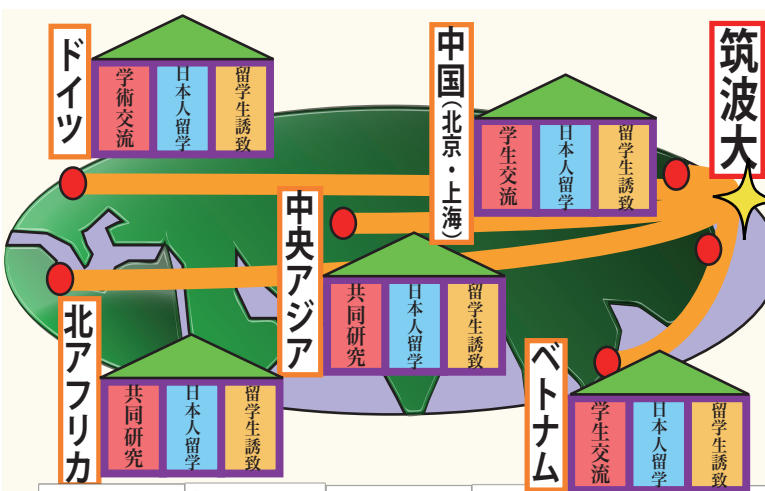
今年7、8月には現地学生を本学に招き、本学生とともに研究体験をする「サマースクール」が行われた。また8月には人文社会系の教員と大学院生がベトナムへ行き、日本への留学が既に決まっていたり、

海外事務所の支援などを得て、本学で学ぶ世界各国の留学生は、約1700人(2012年5月時点)。彼らに本学でどのような生活を送っているのか。ベトナムからの留学生に聞いた。

留学生の声(ベトナム)

ミンさんは昨年、来日。本学で研究を始めた。5歳の娘の他、夫(37)も「家族で一緒に暮らしたい」とベトナムでの技術者の職を辞め、今年来日した。研究に忙しいミンさんに代わり、夫は、肩慣れは長女の育児を担う。このため日本語の習得に力を入れている。ミンさんは「夜間に日本語を学べるようなシステムを充実してほしい」と話している。現在、日本語の勉強中だ。

「大学として留学生が安心して研究できる環境を整えてほしい。現在、日本語の勉強中だ」と話している。現在、日本語の勉強中だ。



事務所設置で留学生急増

事務所の設置で留学生急増。事務所の設置で留学生急増。事務所の設置で留学生急増。

現場職員から



チュニス事務所 コーディネーター 八幡 暁彦 さん

現場コーディネーターの役割はひとこと「言う」と、日本側と現場との橋渡しですが、▽現地関係者との交渉や調整▽ロシア▽現地からの問い合わせの日本語への取り次ぎ……など仕事は多岐に渡ります。

これはからの大学は文科省の事業を待たずとも、国際化について自発的・本格的な取り組みを行うことが緊急課題です。ですが、本学は縦割りの組織が硬直化している面もあるように感じられます。国際戦略室・国際部が中心となり、統一性・整合性のある本格的な国際化が本学で早急に確立されるよう望んでやみません。また社会・国際学群というユニークな学群を持つ本学が日本の大学の国際的展開・活動のインシアティブを取る日が来ることを期待しています。

「大学として留学生が安心して研究できる環境を整えてほしい。現在、日本語の勉強中だ」と話している。現在、日本語の勉強中だ。

「大学として留学生が安心して研究できる環境を整えてほしい。現在、日本語の勉強中だ」と話している。現在、日本語の勉強中だ。

現地の研究者の紹介 宿、交通機関の手配まで!

本学生の 留学促進

5年のうちに留学を行う一方、修士・修士の獲得を目指すのは本学の「グローバル」が最も適当なグローバル人材育成・地域研究イノベーションプログラム。と話す。今後はフレキシブルな学位プログラム。を積極的に海外に送り出すためのプログラムも整備しつつある。その代表が、最短期5年間のうちに留学と修士・修士課程修了をこなす計画。

協定校との交流促進

生や地域研究を行う。その後、修士課程入学後に協定校への留学などを行い、帰国後(協定校)の情報や、留学に関するノウハウを一括管理するデータベース「TIINS」(筑波国際ネットワーク集約ナビシステム)を整備を進める。本紙記の整備を進める。グローバル人材育成をなす計画。

今後の展開

本学は現在、北アフリカ、中央アジアなど、世界5カ国6カ所に海外事務所を持つ。辻中副学長(国際戦略室長)によると、今後、サパワロ(ブラジル)やジャカルタ(インドネシア)、韓国やアメリカに海外事務所・拠点を拡充していきたい意向だ。海外事務所・拠点をどう選んでいくか。その基準や狙いを取材した。本学では海外事務所などの設置を国際化に向けた重点項目として、1年程度で本格化する計画だ。

視点

海外に出ることは、それ自身が大きい。「自己教育」だと思ふ。筆者は、昨年1年間ボランティア活動を目的にベトナムのハノイに滞在した。そこで現地の大学の学生たちと触れ合ったが、彼らのバイタリティには大いに感銘された。彼らの中には、将来、国際社会で活躍しようとする学生もいる。国際語を学ぶ人や、日本でビジネスを起したいなど、日本人学生の留学を促進する体制づくりが進む。これらを利用しない手はない。



遺伝学の研究に広く用いられているショウジョウバエの遺伝子名には、命名者の「遊び心」が込められたものが多い。例えば、それがなく1つの根毛から必ず2本の根毛が生えてくる「ムサシ」遺伝子。日本の研究者が発見したもので、二刀流で名高い宮本武蔵にちなみ命名された。

ネーバランド 遺伝子

生物の成長メカニズムを研究 遺伝子の名前にこめた思い

これは脱皮の時期になると前胸腺という胸部の内分泌器官で作られる。ホルモンが適切なタイミングで分泌されるおかげで、ハエを含むあらゆる昆虫の幼虫は脱皮を繰り返して、成長へ変態することができる。

「ネバランド」遺伝子の成分はコレステロールだ。複数の酵素が働くことでコレステロールはエクスステロイドに変わる。この過程で必要となるのが冒頭の「ネバランド」遺伝子。この遺伝子がホルモンを作る際に不可欠な、酵素の発現を調節する「エクシステロイド」というホルモンの調整するのだ。

「ネバランド」遺伝子が正常に機能しないとどうなるか。エクシステロイドが分泌されなくなると、ハエは幼虫(ワジ虫)のまま、脱皮をしないで一生を終えてしまう。つまり、永遠に大人にならない。



筑波大学 農学系 園芸学 准教授 野村 直人 さん

「ネバランド」という名前を巡っては「インターネット掲示板」で「ちゃんねる」で話題にされて、「野村直人准教授は苦笑する。だが、それだけ准教授の名付けがユニークでインパクトがあった」と言われた。野村准教授の次なるテーマは、同じ遺伝子について、複数の研究者が研究成果を競う場合、それぞれが別々の名前を付けようとするのを防ぐことだ。



人生に立ち向かう力強さを
前園休会場で咲いていたトレンシアの花は、今でも家の庭で咲き続けている。 (昭和54年度体育専門学群卒)

筑波大学 自然図鑑

ツチイナゴ

褐色を呈するが、幼虫は鮮やかな黄緑色だ。いずれの状態でも特徴的なのが、目の周りに刻まれた涙のような模様である。寒空のもと、じっと冬を耐え忍ぶ彼らに、私を魅了してやまない。(写真・文) 武藤将道 生物2年 野生動物研究会

第 30 回全日本大学女子駅伝対校選手権大会 3位入賞、来年のシード権獲得

「来年は関東、全日本優勝狙う」

陸上
第30回全日本大学女子駅伝対校選手権大会が、10月28日に仙台市陸上競技場(仙台市宮城野区)周辺で行われた。本学は9年ぶりの出場となったが、2時間7分41秒で3位という好成績を挙げた。



4区羽田智香と5区新山美帆のたすきリレー

第31回全日本女子学生剣道優勝大会 女子団体準優勝 大将戦で惜敗

剣道

有田祐二監督(体育系・講師)は、今回は相手も強かったが、選手の実力が出きれていない試合も多かった」と語った。

第60回全日本剣道選手権大会が、11月3日、日本武道館(東京都千代田区)で行われ、本学OBの高鍋進六段(平成11年度体育専門学群卒・神奈川県警)が3位に入賞した。

高鍋は前人未到の3連覇を目指したが、準決勝で木田大と対戦し、序盤リードしていたが、徐々に早稲田大の勢いに押され、2ピリオドで逆転を許してしま...

全日本学生柔道 体重別団体優勝大会 男子団体準優勝 東海大に一步及ばず

柔道

全日本学生柔道団体別優勝大会が10月27、28日、ベイコム総合体育館(兵庫県尼崎市)で開催された。今大会は、7人で二つのチームを組む団体戦。本学は男女共に出場し、男子は準優勝を果たし、女子は3回戦で敗退した。

全日本学生選手権大会 山本、全日本に出場決定 女子団体は成績振るわず

バドミントン

第63回全日本学生バドミントン選手権大会が10月19、20日にかけて、クリーナアリーナ(神戸市須磨区)で開催された。男子団体はベスト16、女子団体はベスト8の成績を収めた。

第23回関東大学対校テニス選手権大会 男女ともに決勝進出

テニス

第23回関東大学対校テニス選手権大会が、10月20日、流通経済大(茨城県龍ヶ崎市)で開催され、男女ともに決勝トーナメントへ進出した。

第23回関東大学対校テニス選手権大会 男女ともに決勝進出

女子は日本体育大と対戦し、3-2と辛勝。だがその後の東京大戦で5-0、東京女子体育大戦で4-1と勝ち抜き決勝トーナメントへ進出した。初戦の学連選抜戦では4-1で勝利したが、2回戦で専修大に2-3と惜敗した。

青山学院大に勝ち現在2位 初優勝の可能性も

ラグビー

ラグビー関東大学対抗戦の青山学院大戦が11月4日に埼玉県熊谷ラグビー場(埼玉県熊谷市)で行われ、78-10で快勝した。本学は24日に日本体育大と対戦し、5勝1敗で現在同率2位。

第23回関東大学対校テニス選手権大会

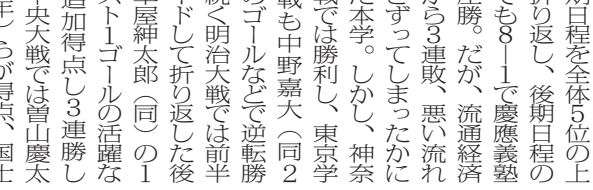
男子は10月28日に早稲田大と対戦。序盤リードしていたが、徐々に早稲田大の勢いに押され、2ピリオドで逆転を許してしま...

第23回関東大学対校テニス選手権大会

女子は23日の準決勝で大阪体育大と対戦するも、前半で12点差をつけられ敗退。24日の3回決定戦では拓殖大と対戦。一進一退の

第23回関東大学対校テニス選手権大会

男子は予選リーグで東京大と勝ち抜き決勝トーナメントへ進出した。初戦の学連選抜戦では4-1で勝利したが、2回戦で専修大に2-3と惜敗した。



青山学院大戦で攻めこむ本学選手

ロンドン五輪・パラリンピックトークショー 大舞台での秘話を語る



トークショーに出席した福見(左)と杉本(右)

2500人の来場者で大盛況

「London2012」ピックトークショーが、10月31日に大学会館ホールで開催された。会場には学内外から約2500人が訪れ、ロンドン五輪やパラリンピックに出場した本学関係者6人が大会の感想などを話した。

トークショーに出席したのは、ロンドン五輪柔道男子60kg級で銀メダルを獲得した平岡拓晃選手(了徳寺学園職・体育2年)、女子78kg級で銀メダルを獲得した杉本美香選手(コマツ・平成18年度体育専門学群卒)、女子48kg級の福見友子選手(了徳寺学園職・平成21年度体育修了)、パラリンピックに出場した水泳の山田拓

朗選手(体専3年)、陸上競技の鈴木徹選手(平成15年度体育専門学群卒)ら6人。岡田弘隆准教授(体育系)が総合司会、山口香穂教授(体育系)がトークショーの司会を務めた。平岡は試合直前の体重の計量で、規定より100gオーバーしていた秘話を明かした。ガムを噛んで液を出したり歩き回って汗をかくなどして、計量を60gちょうどで切り抜けたという。また緒方は選手村や会場でハンマー投げの室伏広治選手や、陸上のウサイン・ボルト選手を見かけたエピソードを語った。「選手村には有名な人がたくさんいた。室伏さんは気さくに話しかけてくれる、男前な人だった」と語り、会場を盛り上げた。

つくばマラソン 晩秋のつくばを走る

本学からも多数参加

第32回つくばマラソン(主催:本学・つくば市など)が11月25日に行われた。フルマラソンと10kmの部に、1万4144人が参加し、快晴の中、晩秋のつくば市内を駆け抜けた。

フルマラソンは本学をスタート、豊里交流センターで折り返し、陸上競技場へ戻るコース。沿道では市民が旗を振り、ランナーを応援する姿が見られた。女子フルマラソンの部では、昨年度優勝した前田さやかさん(セカンドウィンドAC)が、2時間42分27秒で優勝した。前田さんは「自己ベストを更新できた」と喜び、一方「自分の目標タイムには届かなかった」と悔しさをにじませた。

本学からも多くの学生が参加した。体育専門学群開講の自由科目「つくばマラソン」の受講者は、例年通りおそろいのTシャツを着て参加、日頃の練習の成果を発揮した。また、当日はオンライン動画配信サービス「Ustream」を用い、メイン会場である陸上競技場からライブ配信を行い、会場の熱気を伝えた。(12面に関連写真)

海外進出への意欲語る

猶本が副学長らを表敬訪問



笑顔を見せる猶本(中央左)と西嶋教授(中央右)

FIFA U-20女子ワールドカップジャパン2012に出場した猶本光(体専1年)が、指導に当たる西嶋尚彦教授(体育系)と共に10月22日、清水一彦副学長(総務・人事担当)らを表敬訪問し、銅メダル獲得を報告した。

「海外進出への意欲語る」の意欲も語った。猶本は攻撃の要であるポランチとして全試合フル出場。メキシコ戦では豪快なミドルシュートを決めるなど全試合で2得点を挙げ、銅メダル獲得に貢献した。現在は本学に通いながら浦和レッズレディースに所属。「ポスト澤穂希」との呼び声も高く、未来のなでしこ候補として注目を集めている。「海外選手の身体能力は衝撃的だった。(準決勝で)負けたのは悔しかったが、彼女たちのレベルに達しない世界で通用しないと感じた」と大会の感想を話していると言い、海外進出への意欲も語った。

本学でもスポーツの秋

親子ランナーに歓声あがる

第36回秋季スポーツ・デーが10月20、21日に学内18カ所の会場で行われた。2日間とも快晴で絶好のスポーツ日和となり、学生・教職員合わせて5546人が汗を流した。

サッカーや駅伝などの事前登録が必要な「正式種目」、スポーツ・デー学生委員会が主催する「学生委員会企画」、体育会所属の団体が体験教室や公開練習などを行う「サークル企画」が行われた。

ライバルはいつも隣に

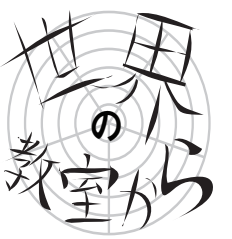
チームに栄光をもたらした二人の武器は持久力だ。他選手と比べると小柄で歩幅が小さく、ランナーとしてはあまり有利ではない体形。だが、走り始めた瞬間から、二人は世界ジュニア選手権3000mに出場するほどの速さを発揮した。練習や私生活も一緒にやる。練習着や私服も二人で共有。たまに着た服が「カブった」ときは、けんかにもなる。「片方が寝坊した時に起こして、寝るからいいですよ。でもそろって表彰台に上がっています」。



全日本駅伝3位の原動力となった双子ランナー 久馬 悠・萌 (体専1年)

二人は、悠は世界ジュニア選手権3000mに出場するほどの速さを発揮した。練習や私生活も一緒にやる。練習着や私服も二人で共有。たまに着た服が「カブった」ときは、けんかにもなる。「片方が寝坊した時に起こして、寝るからいいですよ。でもそろって表彰台に上がっています」。

「ライバルはいつも隣に」二人は、悠は世界ジュニア選手権3000mに出場するほどの速さを発揮した。練習や私生活も一緒にやる。練習着や私服も二人で共有。たまに着た服が「カブった」ときは、けんかにもなる。「片方が寝坊した時に起こして、寝るからいいですよ。でもそろって表彰台に上がっています」。



堀野あゆみ

イギリスへ語学留学に
来て半年が過ぎました。
もうすっかりこちらの生
活にも慣れましたが、そ
れでも、4月1日にヒ
ースロー空港からホスト
ファミリーの家へと向か
うタクシーの中で、きれ
いな国に来たなあ、とこ
じみ思ったことは、今
でも覚えています。
その翌日から1カ月ほ
ど続いた雨模様で、その

友人に教わる世界の広さ

つくばチャレンジ2012



留学先で友人との1枚

のの違いを聞
近にみて、
時には理解
したいと思
うこともあ
るのですが、
彼らを知る
には、世界
は広いんだ
と、当たり
前のことを
思い知らさ
れます。ま
た、政治や
経済など、
興味のない
分野に對して
の考えが変わ
り、楽し過ぎて
います。
語学学校なので、先生
以外は皆、国籍がバラバ
ラです。生活習慣や宗教
がたく、仲良くなつた
先生とパブで飲んだり学
校でお菓子作りをした
り、楽しく過ごしていま
す。



コースを走行するロボット

本学から3団体が出場 自律型ロボットが走る

自律型ロボットが公道を
走行する公開実験大会「つ
くばチャレンジ2012」
が、11月10-11日につく
ばセンター周辺で行われ
た。本大会は昨年で一度終
了した。

全国の大学や企業、研究所
などから36団体が参加し
、本学からは3団体が出場
した。「今年も技術を磨きた
い」という参加者の強い要
望があり、つくば市とつく
ばチャレンジ実行委員会が
主催して今回の開催に至っ
た。

ロボットはあらかじめ覚
えた14ヶ所のコースを
走行。人による外部からの
操作なしに、歩行者や障害
物など周囲の状況を判断し
ながら自走することに挑
んだ。
11日前までは公開走行
実験で、各チームはロボッ
トの調整に励んだ。午後の
本走行ではコースの完走を

し、2013年に新たな大
会を行う予定だった。しか
し、「今年も技術を磨きた
い」という参加者の強い要
望があり、つくば市とつく
ばチャレンジ実行委員会が
主催して今回の開催に至っ
た。

ロボットはあらかじめ覚
えた14ヶ所のコースを
走行。人による外部からの
操作なしに、歩行者や障害
物など周囲の状況を判断し
ながら自走することに挑
んだ。

地球科学の面白さ伝える

地球学類と地球科学専攻
主催のジオカフェが、11月
5日と12日に大会館多目
5階と12階に開催された。ジ
オカフェは地球科学の面白
さを多くの人に広めること
を目的とし、今年9月から
4回開催された。来場者は
コーヒや紅茶を片手に講
演を聞いた。

「つくば市の夏季気候の將
来予測：20年後、40年後、
60年後、どうなる？」とい
うテーマで日下博幸准教授
(生環系)が登壇した。
前半では地球温暖化につ
いて気温上昇の要因には、

対話を通じて悩みを解消 活発に意見を交換する

身近なテーマについて哲
学者を交えて話し合うイベ
ント、第20回目筑波大学哲
学カフェ「ソクラテス・サ
ンバ・カフェ」が10月28日
につくば市民活動セン
ター(アイアイモール)階
で開かれた。



「変化」について対話する参加者ら

企画に参加している。イベ
ント名の「サンバ」は、ソ
クラテスが討論に用いた手
法が「産婆術」と呼ばれる
ことにちなむ。対話を通じ
て人々が重苦しい思い込み
から解放され、心が軽やか
に踊るイメージを、踊りの
サンバに重ねた。
毎回テーマは参加者が関
心のある話題を出し合い、
その場で決定する。20回目
となる今回のテーマは「変
化」。参加者の将来への不
安や、年を取ることへの抵
抗といった悩みなどをき
かずに、「変わることは何
かか」について話が始め
た。「変化」というのは自然
なことなのに、なぜそれが
怖いのか」「変化を受け入
れ、それを楽しむことはで
きるのか」など、参加者か
ら活発に意見が出され、議
論は盛り上がりを見せた。
進行役を務めた五十嵐沙
千子准教授(人社系)は参
加者の個人的な悩みなどの
ごく身近なテーマが、対話

森川氏講演会

「LINE」のヒット要因語る 学生が新サービス提案も

NHN Japan社長の
森川亮氏(昭和63年度第三
学群情報学類卒業)による
講演会が11月22日、2日棟
101教室で行われた。N
HN Japanはスマート
フォンやパソコン向けア
プリケーション「LINE」
を提供する韓国企業の子
法人。「LINE」はスマ
ートフォンの電話帳に登録
した友達と、無料でチャッ
トや音声通話ができるサー
ビスだ。

を通じてここまで深まるか
と毎回驚いている。夢中
で話していたので、あとい
う間の熱い3時間だ」と
語った。
参加した本学生は「初め
て参加したが、話合いの
中でさまざまな考えに触
れ、新しい見方ができるよ
うになった。とても面白
かった」と話した。

1000円とすると、人間が
利用できる水はスポン半
分の熱帯夜になるという結
果が得られたほか、生活圏
が集中している「コンパク
トシティ」の方が、関東全
域に生活圏が広がる分散型
都市よりもやや涼しくなる
ことがわかった。同准教授
は「今後はエネルギー効率
の良いコンパクトシティに
移行していく必要があるだ
ろう」として講演を締めく
くった。

後半では、筑波山の湧き
水について、写真や動画を
用いて説明。筑波山の湧き
水が出る地点は山頂近くか
ら山麓までさまざまなか
らあり、雨水が地下に浸
透してから約40年の歳月を
かけて流動し湧き水となる
ものもある。湧き水から地
下水の流れや水量を計算
し、「筑波山の中にある地
下水量は霞ヶ浦の水貯留量
の半分弱に相当する」と江
村教授が話すと、会場から
驚きの声が上がった。
来場した牧野悠さん(生
資'09)は「つくばという

土地に根ざしたテーマで
親しみをもちて聞けた」と
話した。

講演会では「LINE」
の新規サービス案を事前に
参加者から募集しており、
森川氏が選んだ優秀作品の
発表も行われた。優秀作品
には3つが選ばれ、提案者
には森川氏から賞品が手渡
された。スマートフォンで
撮った写真に「LINE」
上で友達と書き置きあえる
サービスを提案し、優秀作
品に選ばれた森谷文恵さ
ん(心理'2年)は「予想し
てなかったのが驚き。講演
を聞いて、やりたいことを
やってみることが大事だと
感じた」と興奮気味に話
した。

12日に行われた4回目
は、「筑波山の湧き水」に
ついて、江村真貴教授(生
環系)が登壇し、前半は河
川、大気中などにあるさま
ざまな水や湧き水につ
いて説明。地球上の水量を

奨学金を受給している。イ
ベント名の「サンバ」は、ソ
クラテスが討論に用いた手
法が「産婆術」と呼ばれる
ことにちなむ。対話を通じ
て人々が重苦しい思い込み
から解放され、心が軽やか
に踊るイメージを、踊りの
サンバに重ねた。
毎回テーマは参加者が関
心のある話題を出し合い、
その場で決定する。20回目
となる今回のテーマは「変
化」。参加者の将来への不
安や、年を取ることへの抵
抗といった悩みなどをき
かずに、「変わることは何
かか」について話が始め
た。「変化」というのは自然
なことなのに、なぜそれが
怖いのか」「変化を受け入
れ、それを楽しむことはで
きるのか」など、参加者か
ら活発に意見が出され、議
論は盛り上がりを見せた。
進行役を務めた五十嵐沙
千子准教授(人社系)は参
加者の個人的な悩みなどの
ごく身近なテーマが、対話

奨学金を受給している。イ
ベント名の「サンバ」は、ソ
クラテスが討論に用いた手
法が「産婆術」と呼ばれる
ことにちなむ。対話を通じ
て人々が重苦しい思い込み
から解放され、心が軽やか
に踊るイメージを、踊りの
サンバに重ねた。
毎回テーマは参加者が関
心のある話題を出し合い、
その場で決定する。20回目
となる今回のテーマは「変
化」。参加者の将来への不
安や、年を取ることへの抵
抗といった悩みなどをき
かずに、「変わることは何
かか」について話が始め
た。「変化」というのは自然
なことなのに、なぜそれが
怖いのか」「変化を受け入
れ、それを楽しむことはで
きるのか」など、参加者か
ら活発に意見が出され、議
論は盛り上がりを見せた。
進行役を務めた五十嵐沙
千子准教授(人社系)は参
加者の個人的な悩みなどの
ごく身近なテーマが、対話

「青木塾」 新聞人・陸羯南を研究

作家の司馬遼太郎氏と青木彰名誉教授の遺志を継ぐ形で、本学卒業生らが明治の新聞人陸羯南(1857~1907)の研究を進めている。これまで陸羯南が発刊した当時のクラフ誌などを復刻したほか、今年の学園祭では「司馬遼太郎と青木彰名誉教授展」を開催。その中で陸羯南の資料展示も行った。関係者は「将来、陸羯南やその関係者に関する小冊子をまとめたい」と話している。(筑波大学新聞代表・本学教授、福原直樹)

青木氏は元産経新聞記者で、同社で司馬氏の1年後輩。2人は現役時代から親交があった。青木氏は1978年、本学の現代語・現代文化学系教授に就任したがその際、司馬氏は新聞「日本」を明治時代に発刊した陸羯南の研究を強く勧めた。青木氏も研究の準備を進めたが、2003年に亡くなった。



「司馬遼太郎と青木彰名誉教授展」の様子

自らがマスコミ誌記者を教える「青木塾」を開いており、そのメンバーが中心となった。研究会はその後、「日本」付録のクラフ誌「日本画報」が富山県の民家にあるのを見つけた。関係資料の発掘を続け、「日本」の付録だった「明治中期分県地図」も復刻している。本年の学園祭ではこれらの資料や「日本」などを展示した。

研究会の代表世話人・高木宏治さん(社会科学部研究科出身)は、「陸羯南は社会現象を客観的に報じ現代ジャーナリストの先駆的存在だった。広範な国際的視野をもつ一方で『日本』日本人とは何か』も追究し続けており、その研究には今日的な意義がある」と話している。

カザフスタン日本学生フォーラム 外交樹立20周年を記念し開催 民族楽器の演奏も

民族楽器の演奏も

「カザフスタン・日本学生フォーラム2012」が10月20~21日に大学会館ホールで開催された。このフォーラムは、日本とカザフスタンの外交関係樹立20周年を記念して行われた。同国に関する日本人や同国を始めた中央アジアからの留学生らが訪れた。

共和国日本大使の夏井重雄氏、駐日カザフスタン共和国大使館公使参事官のクルマンセイト・バートルハン氏、和光大学でカザフスタンの文化について研究している坂井弘紀氏がカザフスタンの過去と現在について講演を行った。

クルマンセイト・バートルハン氏は「発展し続けるカザフスタンー日本との関係分野で他国との関わりを築いた橋本千紘さん(人文3

年)は、「ロシア語の授業で紹介され、参加した。ドングラは、絃が本しかないのに音色が豊かで驚いた」と話した。

学生実行委員長の岩元絆美さん(国総4年)は「本学は中央アジアとのつながりが深い大学。今回のフォーラムでカザフ国立大学の交流が深まり、カザフスタンの研究者が集まることのできてよかった。カザフスタンの状況や留学についての情報も発信でき、これから留学する人への助けにもなったと思う」と語った。

しるくの大まちゃん No.37 7プレゼント by つく☆つく
もー。スマホは手袋はずさないといけないのが面倒だわ。
ふーん。あつぞ
たまちゃん!
あした、ノートつけていませよ。
新商品 880円
新商品 210円



民族楽器で美しい音色を奏でる出演者

開学40周年イベント「筑誕」 筑波の「いま」を表現する THK筑波放送協会が主催

本学開学40周年記念イベント「筑誕」が11月3日に大学会館講堂で行われた。このイベントは、「筑波大学の「いま」を表現し、将来に残すことを目的に、2013年10月1日の本学開学40周年を学生の手で祝うもの。THK筑波放送協会が主催し、アカペラサークルDoo-woop、応援部WINS、斬桐舞、ときめき太鼓塾、落語研究会が出演した。

第一部では応援部WINSが迫力ある演技を披露し、落語研究会が「誕生日」をテーマに落語を披露した。また、THK筑波放送協会が「発見」と題し、ある分野で秀でた活動をしている本学生を取材し、プレゼンする企画が行われた。

第二部では、「発見」と題し、筑波大生で紹介された4人がステージに登場したり、映像で出演。それぞれの研究分野や研究過程を紹介した。ルービックキューブ研究会の佐島優さん(工シス4年)は、大会で日本記録を樹立したこともあるルービックキューブの腕前を披露。目隠しをした状態でルービックキューブを完成させると、会場からは歓声があがった。

課外活動団体リーダー研修会 団体間の交流を深める

学生支援室が主催する「課外活動団体リーダー研修会」が12月8~9日に行われる。これは、体育文化・芸術系の課外活動団体の次期リーダーや役員を対象に毎年開催される研修会。各団体の運営や活動をサポートすることが目的。本学生や教職員、紫峰会役員など毎年約250人が参加しており、現在参加者を募集している。

今年の研修会のテーマは「Innovation」。各団体の活動を振り返り、名称は「1」というクイズの答えである「ペン」から話題を上げ、いつのまにか漫画の話で盛り上がっている。クイズに向かう真剣な表情からは想像もできない、屈託のない笑顔が絆の強さを示している。



分野から出題される。そんなクイズ好きの同団体だが、単にクイズを解くことが活動目的ではない。その真の目的は「クイズを通して人との交流や知識を深め、日常の生活に潤いを与えること」

最後に吉川さんに「クイズの魅力は」と質問してみた。いつものように即答はひかず、困ったように笑う会長に「それはしっかりと答えよう」という会員からの鋭いツッコミは親密な証。すると今度は優しく笑い「正解したときの嬉しさが魅力」と話した。

クイズ研究会

「腕と首周りが大きく露出するシャツは？」という問いに、解答者は間髪入れず「タンクトップ！」と答える。



クイズがつくる解けない絆

とした雰囲気も魅力だ。ジャンルは「なんでもあり」。時事、政治、スポーツ、文学、また「かつて存在した右大臣と左大臣のうち位が高いのは？」という学校で習ったような歴史問題もあり、幅広い

と、会長の吉川悠希さん(社工2年)は話す。その言葉通り、クイズの合間には「正答」から話題を広げ、話し込むこともしばしば。例えば「アールゼンチンなどの国々で使われている通貨単位のうち、吉川さんの言葉は全部

Who's Who?

つくば市長賞など多数受賞

たかと 本多 隆利 さん (生物4年)



彼の優しい笑みは、仲間と共に未来を見据える

「好きなことに巡りあわせてくれた人、支えてくれる人たちに好きなことで恩返しをしたい」と真摯な表情で語るのは本多隆利さん(生物4年)。8月末に、全国の大学生が研究発表を行うリサーチフェスタ2012で最優秀賞であるつくば市長賞を受賞した。

受賞したのは「ショウジョウバエを用いたヒト精神疾患の遺伝学的研究」。今まで統合失調症の原因とみられる遺伝子は発見されていたが、その遺伝子が脳の機能に影響を及ぼすメカニズムは解明されていなかった。本多さんは新たにショウジョウバエを用いた実験

で、その遺伝子の働きを理解する糸口を提示・説明し、高評価を受けた。「好きな」科学に巡りあわせてくれたのは、高校の理科教師の叔父だ。「小さなころから叔父に顕微鏡や天体望遠鏡を借り、川の中の微生物や星を観察するうちに、科学が好きになった」と振り返る。天体望遠鏡をのぞいて、広大な宇宙に想像を膨らませ、顕微鏡をのぞき、身近にも知らないものがあると感嘆した。「人が知らないことに迫りたいと、小さいころから思っていた」。着ちかいた雰囲気の本多さんも科学の話になると子供のようだった。科学の中でも天文学や生物学に興味があり、高校生のとき、生物学を中心に研究し始めた。

つながりで築く科学 「好きなこと」で恩返し

団研究の意義を学んだ。今まで一人の実験が多かったが、高校で生物部に入ると一人ではできないことも増えた。「アイデアがあっても知識や技術が足りず、顧問や大学の先生にアドバイスをもらった。生物の飼育も一人ではできず、部員に助けをもらった。高校生から始めた書虫の研究では、高校生を対象とした国内で最も伝統と権威のある「日本学生科学賞」で、3番目にあたる環境大臣賞を受賞した。「仲間と受賞の喜びを分かち合えた」。

顧問の勧めもあり、本学に入学を決めた。入学後は1年次から研究を始め、3年の夏にはウィーンに留学した。学生であるが、研究所に雇用され、一研究者として扱われた。ウィーンバイオセンターの研究員に何度も質問し、世界各国の留学仲間と共同生活する中で自分を磨いた。初めは英語で「自分らしき」が表現できず、とまどうことも。しかし共に生活する中で、「研究が好き」という志が同じだと気づいた。「国

や研究分野の壁は超えられる。世界中の同世代の同志に会えたことが大きな収穫だ」と笑う。「支えてくれる」のは科学関係者だけではない。本多さんは科学をわかりやすく伝えることを目指しており、その一環で芸術専門学群の学生と協力し、研究内容を絵にするなどの活動をしてきた。「誰にでも科学をわかりやすく伝えることは、これからの研究者の責任だと思つ」と強く語る。

卒業後は大学院に進学するつもりだ。「まずは博士号を取る。面白く、重要な課題に常に挑み続けたい」。故郷は坂本龍馬ゆかりの地、長崎。本多さんは龍馬の大ファンだ。ノートパソコンに貼られた龍馬のシールが光る。「人と人、アイデアとアイデアを結びつきたい」。革新的なアイデアや行動力で日本をあとと言わせた龍馬のように、本多さんも世界を股にかけて時代を切り開いて行きたい。 (中島佳奈 11人文学類2年)

編集後記

今年の執行代は個人的な顔ぶれがそろった。自称壺売り吟遊詩人の副編集長N島。男の娘な取材人N宮。ゲバ棒を携えてパソコンと会話するN島。学園祭に魅せられた接客系女子K。心のない発言がチャームポイントのU。留学生と都会の荒波に飛び込むO。デニムとベトナムマスターのK。小動物系編入生S。微笑みと新聞の使者T。本果奈 11人文3年

次号は

2月4日(月)

発行予定です

ときめき太鼓塾 10周年記念公演鼓舞



粋な音色が場内に響きわたる

5面へ

第36回秋季スポーツ・デー



秋晴れの空のもと、仲間と汗を流した

9面へ

第32回つくばマラソン



晩秋のつくばを、ランナーは一斉にスタートした

9面へ

筑波大学開学40周年記念プレイベント筑誕



華やかなダンスで会場を盛り上げるWINS

11面へ

学芸

スポーツ

スポーツ

学生生活